



木村家の由来

橋立を代表する北前船主家の一つに増田又右衛門家があります。木村家はこの増田家の一族です。増田家も木村家も、かつては屋号を「桶屋」と称し、後に「^{おけや}大家家」と字を改めています。「増田」という姓は、弘化2(1847)年、大聖寺藩の財政に貢献したことで、藩主から賜ったものです。木村家では、これより先に、5代又兵衛が松前藩主から「木村」姓をもらっていました。

木村家に伝わる覚書によれば、5代又兵衛は「はじめ桶屋家に勤め通力丸の船頭となり、故ありて松前伊達家に船勤め、末廣丸の船頭たり、後に松前藩の御手船となるに及んで松前藩士に列し、木村姓を許さる。実に家声を興したまひ、中興とあがむ」と記しています。



木村邸(1920年築) 2011年から「木村素衛・有香ふるさと館・かふえりゅうじょ」として活用されている。



橋立のジゲ浜。沖合に北前船が停泊、伝馬船で荷物の揚げ降ろし、家族はおにぎりなどを差し入れた。



旧増田又右衛門邸の石垣と塀。
石垣の表面は笏谷石、内部は深田石。



「北前船の里」・加賀橋立が生んだ木村兄弟

北前船は、江戸時代中期から明治時代にかけて、大阪と蝦夷地（北海道）を結ぶ海の街道を航海していました。米をはじめとする生活必需品を北海道にもたらし、北海道から昆布や、肥料として綿花栽培等を支えたニシンを各地に運ぶ、ライフラインを担っていました。それだけに儲けも大きく、一航海で千両の利益を得たといわれます。しかし、難船の危険を伴う、ハイリスク・ハイリターンの北前船経営は、「板子一枚下は地獄」の言葉通りに大きな悲劇を生むこともありました。

木村家も、明治時代後半、北前船経営が衰退期を迎え始めた頃、船の遭難で海運業から撤退に追い込まれました。しかし、そのことがきっかけで「これからは教育の時代だ」として、故郷・橋立を離れ、京都で艱難辛苦に耐えながら木村素衛と有香の兄弟は、やがて教育と植物学の世界で大きな社会貢献を実現していくことになります。

木村 素衛 (1895-1946)

KIMURA Motomori

「わがいのちの一切を与えつくすことが教育愛の実践である」

愛ある教育を説き、自ら行動し、本物の教育者をそだてることに命の限りをつくした木村素衛は、明治28(1895)年、現在の加賀市橋立町に生まれました。

病気や貧乏と対峙した少年時代から青年時代には、自分のあるべき姿を模索し、次第に哲学に傾倒していきました。大正9(1920)年、25歳になった素衛は、京都帝国大学で西田幾多郎に師事。家族、そして恩師の西田から限りない愛の深さを学び、木村素衛独自の「生きた哲学」を確立します。その後、教職を得て、昭和8(1933)年、京都帝国大学で教育学を担当。素衛の「子どもを愛する」ことから始まる「教育愛」は信州を中心に多くの教師たちに伝わり、全国に広がっていきました。

素衛が教育愛を説いた時期は、ちょうど戦争という大きな時代の混迷期に重なります。教育の現場も変革を余儀なくされ、多くの教育者が迷い悩む中、彼らを導き、そして、子どもたちが「世界の中の自分を自覚し、考え、行動できる人間」へと成長できるように、深く限りない「愛」のメッセージを数多く残しています。

戦後の教育再建に最も期待される中、昭和21(1946)年、全力で走った生涯を閉じました。早すぎる50歳の死でした。しかし、78年を経た現在、素衛が残した愛の言葉は、色あせることなく、いきいきと、まるで美しい旋律のように私たちの胸に響いてきます。

【参考文献】張さつき『父・木村素衛からの贈りもの』(未来社、1985年)



昭和15(1940)年撮影



北前船の船乗りの暮らし

冬の間の二か月ほど、船乗りとその家族は、それぞれの船主のところにやってきて、囲炉裏のそばで団らんすることがよくありました。素衛の生まれた時も「惣立ち」がまだなら、そうであったでしょう。素衛はこの人々の笑いさざめく団らんの声を子守歌として聞いて育ちました。素衛は人と語り合うのが大変に好きであったと伝わりますが、素衛の体の中にはこの北国の囲炉裏を囲んで談論風発することを好む祖先の血が流れていたにちがいありません。

自然を相手に豪快な闘いを挑む船乗り達、開拓精神にあふれ力強く外に出てゆく男たち。囲炉裏を囲みながら歌も出てくるだろう。港々を回っているのだから、珍しい話や面白い話は山とあります。話し声は自然と大きく笑い声は高い天井をゆるがすようです。聞いている者は、まだ見ぬ新しい土地に大きな夢をふくらましたでしょう。ゴウゴウと鳴る海なりの中に、彼らの負けじの大声が響いてきます。



北海道初山別で撮影された写真。北前船で運ばれたと考えられる、米俵等の物資を印半纏を着た人たちが積み降ろししている様子が伺える。梶谷家から木村家に伝わった写真。



提供: 北前船日本遺産推進協議会



現在、木村邸は見学者に加賀棒茶や菓子を提供するなど、憩いの場として活用されています。



木村有香の誕生

明治33(1900)年3月、代々北前船主を家業とする木村家に生まれました。
「有香」の名前は芭蕉の句に由来します。

わせの香や 分け入る右は 有磯海

上記の句が出典のようです。芭蕉が越中から加賀の国へ入る時、初秋で早稲が香る海辺の風景を写生した一句です。当時としては珍しく洗練された、粋な名前です。又平の学識の豊かさが感じられます。実際、有香の父又平は学問を好み、文筆をよくしました。

有香の生まれた時期、すでに木村家は北前船経営は不振となり、家運が傾きつつありました。又平は、難局にある事業を経営する商才がないことを悟って、船主を廃業し、家族とともに大阪に働きに出ることになりました。しかし、事業は失敗し、再び橋立に戻って先祖からの家屋敷を親戚に売り払い、妻きみの実家を買入れ、明治33年(1900)年に大聖寺へ転居しました。大聖寺での暮らしも長くは続かず、明治40年、祖母美加は「これからは教育が大事な時代になる。孫たちに教育を受けさせよう」と京都へ引っ越すことになります。



写真提供: 富山県朝日町教育委員会

「有香」の名前の由来となった芭蕉の句碑。



木村又平(後ろ中央) 妻きみ(前列左)
有香(4歳、中央)、素衛(9歳、右端)



京都での木村兄弟

京都での生活は、貧乏と闘うこと、病魔との闘いとなりましたが、決してそれだけではありませんでした。素衛とその弟有香は、京都に残る古い日本文化に魅せられることとなります。二人は暇をみては、数多くある寺社を片っぱしから見てまわりました。「形」と「色」に対する生来の感受性、敏感さは京都においてこそ、有効に働いたようです。兄弟は京都の文化に心踊らせ、興奮しました。

京都一中には村山槐多(1896-1919)の存在がありました。大正2(1913)年、槐多は「信州の風景」を一中の絵画展に出しています。槐多が使う大胆なコバルト色に兄弟は強く惹き付けられています。二人は、明治41(1908)年から始まった文展を、毎年必ず、何回も見に行きました。大聖寺にいたら、橋立にいたら、こんな幸福は味わえなかったと、二人はしみじみ思うのでした。

京都・三条の三角堂で槐多の木だけの大きなデッサン画を見つけた時は、素衛は大騒ぎしたと妻京子は昔を思い出しています。大変に気に入ったけれど、素衛にとってはなにしろ値が高い。いつも京子には大いばりの素衛が、それでもちゃんと大急ぎで京子の所に帰って来て買ってほしいかと聞いたといいます。そんなに欲しいものならと京子もお金を工面し、素衛は飛ぶようにして家を出て行きました。三角堂の主人は、木村君が買ってくれるのならと他の槐多のデッサン2枚をつけて売ってくれました。昭和8(1933)年、素衛が39歳頃のエピソードです。



木村素衛(タイトル不詳)



木村素衛と妻京子



ヤナギ研究と牧野富太郎

大正11(1922)年、東京帝大理学部植物学科に入学した木村有香は勉学にいそしみました。兄素衛の手ほどきを受けたラテン語やドイツ語の上達は著しく、もう自由に読めるようになっており、まだ国内に紹介されることの少なかった外国文献を原書から吸収しました。

大正12年になると、卒業論文のテーマとして指導教官である早田文蔵教授から「ヤナギをやるのか」と薦められました。そこで、有香は中学時代から文通していた植物学の大御所、牧野富太郎先生の自宅を訪ねて意見を聞いてみました。牧野先生は「ヤナギは大したテーマだ。これはやったほうがよい、是非ともやってもらいたい。ただしヤナギというやつは実にイヤなものだ。ヤナギは春から夏にかけて葉の形も大きさも変わるので、ついうっかりすると騙される。それでよほど用心しないといかん。君は10年か15年は就職しないで一生懸命全国を駆け回ってヤナギを集めなさい。それでヤナギが解ったと思ったら、君は学者として見込みがないよ」と答えた。

木村は「よし、そんなに難しいものなら一つやってやろう」という気持ちになりました。それからの有香は、ヤナギ一筋の研究に励むこととなります。



ネコヤナギ



シダレヤナギ



ポプラ



センダイザサを手にした牧野富太郎先生(中央)
木村有香(左)、岡田要之助(右)
昭和3(1928)年秋、仙台市亀岡山で撮影。



昭和天皇と木村有香

昭和30(1955)年、仙台市松島町で行われた植樹祭を訪れた昭和天皇に、有香が進講したことが機縁となって、翌年から毎年の夏、那須や下田、皇居で天皇の植物研究の相手をつとめることになりました。昭和38(1963)年5月、天皇・皇后が再び仙台を訪問した時、有香はすでに定年退職後でしたが、名誉教授として後継の園長らと共に植物園内を詳しく案内しています。昭和天皇は、この時の印象を、翌年の新春歌会始で次のように詠んでいます。

城あとの 森のこかげにひめしゃがは うす紫に 今咲きさかる

ヒメシャガはうっかりすると踏みつけそうになるほど小柄ですがアヤメ、カキツバタ、ハナショウブにない優しさがあるようです。



ヒメシャガ



昭和天皇と木村有香



木村素衛の記念碑

信州には、木村素衛の石碑が5つあります。その中で最も新しいものは、昭和56(1981)年、松本市内の信州大学教育学部附属松本小学校の庭に子供たちの手で建てられました。

小学校のメダカ池の氷もすっかり溶け、池の鯉も少しずつ動き出し、春を感じさせる季節になりました。私たち六年生はこの度小学校卒業記念品として、木村素衛先生の詩の碑を小学校の庭に建立いたしました。木村先生の詩は次の通りです。

底ひなく 深き愛あり ますらをよ 命の限り 努めざらめやも

この詩は、昭和13年、現在の附属小学校がまだ女子師範学校と呼ばれていた頃、素衛が先生を対象に講演をした後、浅間で書いたものだと説明していただきました。

私たちは、この石碑の前で貧しい農民のために命を賭けた多田加助や、自分の生活のすべてを捨てて世界の不幸な人々のために「人類はみな兄弟」と叫び、一生を赤十字に捧げたアンリ・デュナンのように誰に対しても、限り無く深い愛を注ぎ、一生懸命、凛々しく、これからの人生を励もうと誓いました。



信州大学教育学部附属松本小学校の碑
(昭和56年3月建立)



小石に願いを書いて埋める
松本附属小学校の子ども達

長野県下5つの記念碑

